

## “病い”が急に悪くなる時 —慢性病で療養中の方やご家族へのメッセージ—

開催日 平成19年3月10日

講師 本学講師 福田和明

近年、高齢社会、診療報酬改訂に伴う入院日数の短縮化、包括医療の傾向、入院医療費上昇などに伴う日帰り手術や在宅ハイテク医療の進歩により入院治療を必要とする患者は、高齢・重症化している。そのような医療環境の変化の中、治療優先の下に侵襲的な治療が行われる対象として、慢性病の急性増悪、あるいは治癒しない病気の急性増悪の繰り返しや痛がある。

急性増悪を繰り返すことが多い主な慢性病には、慢性閉塞性肺疾患、慢性心不全、関節リウマチや全身性エリテマトーデス等の膠原病などがあり、それぞれ推定患者数は約22万人、約100万人、関節リウマチは約70万人である。その患者数は年々増加傾向にあるが、医療技術の進歩により生命予後は改善してきている。しかし、その一方では、急性増悪を起こして再入院を繰り返す患者の増加が大きな問題になっている。

慢性病患者は普段の生活をおくりながら、病気の管理をも行わなければいけない状況にある。患者らが試行錯誤を重ねながら、病気の管理に取り組んでいることは多くの研究で実証されている。そうした患者が急性増悪を繰り返してしまった場合、どのような身体的・心理社会的影響を受けてしまうのだろうか。侵襲的な治療を集中的に受ける必要のある患者も多く存在し、過酷な治療環境のもとで彼らはどのような体験をしているのだろうか。また、急性増悪後の転帰としては、病気や患者によっても異なるが、さらに病気が進行してしまったり、最悪の場合には死に至ることもある。もちろん、再び社会へ復帰する場合もあるわけだが、急性増悪後の経過の中で、患者らはどのような体験をしているのだろうか。

彼らへのインタビューを通して、慢性病という“病い”が急に悪くなる時の様々な現象について、看護の視点から考えてみたい。